

くらしにやさしい街 … 志木、よりよい環境を未来に残すために

エコシティ志木通信

12月 1 日 (No.48・桜の紅葉がきれいです号)

2007
*
12月

NPO法人エコシティ志木

代表理事 天田 眞

〒353-0006 埼玉県志木市館 1-1-2-108

<http://www.cc.e-mansion.com/~eco/>



写真：天田 眞

勝手にレッドデータ of 志木 (34)

畑のウツギ

ウツギはユキノシタ科の落葉低木。枝が中空になっていて漢字では「空木」。特にめずらしくはないけれど、ここで取り上げるのは、畑の境界として植えられ、「卵の花の匂う垣根にホトトギス早も来鳴きて・・・」と「夏は来ぬ」に歌われた畑の中のウツギのこと。十数年前までは幸町の畑で名残りを見かけたが、区画整理が進み殆んどなくなってしまった。なぜウツギを植えたのかは、活着が良く枯れにくいから等諸説あるようだ。ウツギの花に香りは無く、「匂う」とは花が美しく咲いているという意味。(写真は新座市野火止5丁目で)

(天田 眞)



9/8
(土)

秋の夜に虫の声をきこうかい

6日から7日にかけて台風9号が関東地方を通過し、開催が危ぶまれましたが、幸い柳瀬川の増水は大したことはなく、9日当日は予定通り



虫の種類をしらべます



エンマコオロギ

り行うことができました。

ただサミット前に集まったのは、総勢13名（うち子供4名）で、やはり台風による足元の悪さなどを心配されたのでしょうか、例年よりははるかに少ない参加者でした。

教育サービスセンター岩澤所長の挨拶の後、早速虫取り網を持って、サミット裏の川原で虫を探しました。

エンマコオロギやツヅレサセコオロギ、クビキリギス、ショウリョウバッタ等をみんなで捕まえました。

捕まえた虫を昆虫図鑑で調べた後、逃がしてやりました。また、虫の声をCDラジカセで聞いて、何の虫の声を理解しました。

すっかり暗くなってから、柏町の住宅街の方へ行き、カネタタキのチンチンチンという鳴き声を聞くことができました。

最近では樹上にいるアオマツムシのリー・リーという鳴き声がすごくて、他の虫の声はほとんど聞き分ける事が出来ないほどです。

(山崎光久)

■ 志木小学校・屋上ビオトープより

平成15年3月の竣工から4年半が経過しましたが、毎年春と秋の年2回「ビオトープ見学会」を実施しています。

その間鳥や風によって種子が運ばれ、見学会の都度新しい植物が見られ、狭い空間に約133種類の草本と、66種類の樹木が観察されています。

草本の中では、絶滅危惧種の「タコノアシ」が10株ほど観察されました。

一時大量に増えた要注意外来生物の「セイタカアワダチソウ」は、子どもたちによる抜き取りで相当減りましたが、代わって最近は「メリケンカルガヤ」が目立つようになりました。水路には特定外来生物の「オオフサモ」も見

られ、駆除が急がれます。

屋上ビオトープは、地球温暖化防止の「屋上緑化」として効

果がある他、慶応志木高校と宝撞寺の中間にあり、緑の回廊として一翼を担っています。

この度、日本生態系協会主催の「全国学校ビオトープコンクール」へ応募しました。参加校は153校あり、10月19日に現地審査を受けましたが、結果は12月にわかる予定です。
(埼玉県生態系保護協会志木支部長・山崎光久)



屋上ビオトープのタコノアシ

10/7
(日)

その1・柳瀬川駅 → 淵の森

1回目は、約50名が参加し、東武東上線「柳瀬川」駅～JR武蔵野線「新秋津」駅までを歩きました。主な見所としては、◆東武東上線の柳瀬川橋梁【上り線のレンガ製の橋脚は1914年（大正3年）開通時のもの】、◆東京都清瀬水再生センター【多摩地区最大の下水処理場、処理面積は7,884ha（9市）、これより下流の柳瀬川の平常時水量の約6割はこの放流水】、◆東川の流入【武蔵野線「東所沢」駅近くに所



柳瀬川鉄橋を望む（10/7）



淵の森で（10/7）



起点が近くなりました（11/3）

沢市の下水処理場（所沢浄化センター）があり、これより下流の水量の殆んどが下水処理水で水質が悪い】、◆金山調節池【面積は約3ha、貯留量は約46,000m³、湧水が多く湿生生態系が形成されていて市民が管理に関わる】、◆清瀬金山緑地公園【都市型公園だが上流部には雑木林があり、河川改修で河畔の樹木が失われたが市民団体の活動により守られた】、◆アカバツケ【蛇行した川が崖線に接しているところで、かつては赤土の地層が露出していた】、◆中里緑地保全地域【空堀川に沿った崖線緑地と平地林、カタクリ等の野草群生地、市民が管理に関わる】、◆淵の森【東村山市と所沢市にまたがる雑木林で柳瀬川に接している、開発計画に対する市民の保全運動により公有地化された、淵の森保全連絡協議会の会長はスタジオジブリの宮崎駿監督】などでした。

11/3
(土)

その2・淵の森 → 狭山湖

2回目は、約30名が参加し、JR武蔵野線「新秋津」駅～西武狭山線「西武球場前」駅までを歩きました。主な見所としては、◆曼荼羅淵と調節池【柳瀬川が急な蛇行をしている部分で河畔林と天然河岸が残る、河童の伝説がある】、◆柳瀬川の所々に残る天然河岸、◆所沢市荒幡富士市民の森【この付近では最も高い丘で、所沢市指定の緑地、埼玉県が設けた狭山いきものふれあいの里センターがある、頂上には浅間神社と荒幡富士（明治中期に築造したもの）がある】、◆柳瀬川基点【狭山湖堰堤の下、大鐘橋のたもとに石標がある】、◆狭山湖（山口貯水池）【東京都の上水道のための貯水池で、1934年（昭和9年）竣工、多摩川の羽村取水堰、小作取水堰で導入した水が主体となっている、南側には多摩湖（村山貯水池）がある】などでした。

ともに、予想以上の参加者が集まり、楽しいイベントとなりました。（伊藤智明）

10/13~14
(土・日)

いろはふれあい祭りに参加しました 【いろは遊学館】

◆ 柳瀬川・出前水族館 冬鳥写真とお宝マップ展示

毎年恒例の柳瀬川・出前水族館を今年も出展しました。今年は、マハゼ・ウキゴリ・ヌマチチブ・コイ・ギンブナ・モツゴ・ドジョウ・カダヤシ（特定外来生物）・グッピー（要注意外来生物）などのお魚の他、テナガエビ・ヌマエビ・ヌカエビ・アメリカザリガニ（要注意外来生物）などの甲殻類、ハグロトンボ・小山トンボのヤゴ、オオフサモ（特定外来生物）・オオカナダモ（要注意外来生物）など

の水草も展示しました。

また今回は、これから柳瀬川や新河岸川などに飛来してくる冬鳥の写真展示（提供：（財）埼玉県生態系保護協会志木支部 山崎支部長）や、志木まると博物館“河童のつづら”プロジェクトで作成途中のお宝マップ「志木の水と緑のお宝マップ」展示なども行いました。

（伊藤智明）



展示した「お宝マップ」

◆ 布ぞうりづくり実演コーナー

いろはふれあい祭りに、当会から平成16・17年度は運営委員長として、第4回目となる今年度は協力者として関わりました。私は、今年度は役職から離れ、恒例のパネル展示と柳瀬川・出前水族館に加え、「布ぞうりづくり実演」をおこないました。布ぞうりは健康にも良いということで今年はブームになっています。

私は、数年前に新座市の東北コミュニティーセンターでの「親子夏休み教室」での布ぞうりの講師をキッカケに、現在では、新座・志木・

富士見市の3市で構成しているリサイクルプラザ・利彩館で講師をしています。

今回のふれあい祭りでは、実演コーナーは初めてで、ブームも重なり、人の輪が何回もありました。作り方にもいろいろあり、質問に困らないよう、本を数冊買いました。

私はいつも「環境を考え、着られなくなった木綿のゆかたや洋服・ロープ・工具があれば簡単にできます。電気を使用するアイロンは不要です」と呼びかけています。

（山口美智江）

8/5
(日)

9/2
(日)

志木の「水と緑のお宝マップ」づくり

今までの当会の活動の成果を、ギュッと濃縮した、志木の「水と緑のお宝マップ」がつくれ



ないかと、8月5日と9月2日の二日間、マップづくりのワークショップを行いました。

まだ、データを地図上に落とす段階ですが、10月のいろはふれあい祭りで公開もいたしました。今後も随時、ウォーキングやワークショップを繰り返しながら来年度中の完成をめざしています。

完成品は「志木まると博物館 河童のつづら」のアイテムとしてこれからの活動に活かしていく予定です。ご期待ください。

(毛利将範)



水塚



水神様？



新河岸川と昭和時代の堤防

ご案内

宗岡をぶらり散歩 ～水と人との関わりの歴史～

今までのマップづくりの成果を活かし、また今後の完成に向けて、気軽にウォーキングをしつつ、さらに情報収集もかねて「宗岡をぶらり散歩」を企画します。多数ご参加ください。

◆宗岡をぶらり散歩 ～水と人との関わりの歴史～

【日時】3月2日（日）10時～16時頃 【集合】10時にいろは遊学館前

【散歩先（予定）】

いろは商店街（野火止用水跡）→いろは樋→旧村山快哉堂→宗岡閘門跡→三本の堤防→江戸の時代堤防→樋門→水塚→荒川堤外 等
※散歩後、秋ヶ瀬スポーツセンターにて懇談

会を行います。

【持物】お弁当、水筒、季節の対策、帰りのバス代

【参加費】500円（会

員200円、中学生以下は無料）

【主催】NPO法人エコシティ志木&（財）埼玉県生態系保護協会 志木支部

【後援（申請中）】志木市、志木市教育委員会

【問合せ】048-471-4275（毛利）





いろは橋下流の宗岡閘門解体跡の残骸

《続》新河岸川の改修工事

エコシティ志木代表理事 天田 眞

第9回(2007年6月号)で、新河岸川と荒川の治水史を取り上げましたが、今回は大正10(1921)年度から昭和5(1930)年度にかけて施工された新河岸川改修工事の概要と志木に築造された構造物について、昭和6年に埼玉県が発行した工事報告書を元に紹介します。

1. 新河岸川改修工事の概要

国の直轄工事として、当時の荒川への合流点(朝霞・和光の境界)から下流に新河岸川新川を開削し北区岩淵で隅田川(当時の荒川下流部)に繋ぐと共に、荒川も岩淵から下流に新川を開削することにより、新河岸川への荒川からの逆流等の影響を排除しました。

一方、埼玉県は荒川合流点より上流部分の工事を担当し、蛇行の直線化、両岸への堤防の築造、低水路(平常時水が流れる部分)の設置等が行われました。

新河岸川の計画勾配は低水位(平常時の水位)では志木より上流は4,500分の1、下流は7,000分の1~10,000分の1とされました。

堤防は被害が大きくなる区域を本堤とし、そうでない箇所は低くした小堤にして将来は本堤に改築するものとししました。その高さは本堤では計画高水位(堤防が耐えられる最高水位)上3尺(0.91m)とし、小堤は高水位以下2尺5寸(0.76m)とされました。

低水路の水深は、志木より下流はかなりあり潮位の影響もあるため平常時の舟運には支障がないものの、上流部は水深が浅く航行が困難なため、水位を上昇させるため低水路中に洗堰を

設け、同時にこの地点での上下水位連絡のために宗岡閘門を新設しました。

改修後の新河岸川新川はその延長4里11丁(16.91km)となり、旧川6里34丁(27.27km)に対し2里23丁(10.36km)の短縮となりました。

2. 掘削浚渫工事

志木付近より下流は著しく蛇行した旧川を貫通する新開削とし、それより上流部は概ね旧川沿いの改修となりました。その工事方法は、高水路では人力掘削により、低水路のうち志木より下流部分は人力による掘削及び浚渫とし、旧川沿いの部分が多い上流部は主に機械浚渫としました。労働者は主に沿岸部の農閑労働者を採用しました。

機械浚渫の為に70トンの鋼鉄製浚渫船を特注新造し、平常時の水深が浅い場合には適当な地点に全川を遮断する土俵による洗堰を設けて上流部の水位上昇を図った上で浚渫作業を行いました。

地質は表面は軟質土砂であるものの下段に硬質の砂交じり粘土層及び砂利層が相当あり浚渫上の困難も多かった様です。

3. 堤防築造工事

使用土には充分良質のものを選択したものの、

大部分は掘削土が利用されました。盛土は出来るだけ薄層を充分つき固めながら重ねて、法面土羽打筋芝仕上げ（板で叩き整形し水平線状に芝を植える）としました。芝は大部分飯能、松山（東松山）地方のものを使用し、一部は御殿場芝が使用されました。

4. 護岸床固工事

改修後は蛇行が修整され、流れの衝撃が少なくなるので護岸の必要性は減少したものの、部分的にはその必要もあり、養老橋右岸の福岡河岸付近では栗石積みの護岸が設けられました。また、宗岡閘門洗堰等の重要構造物の保護と志木町河岸活用のためにも堅牢な護岸が望ましく、コンクリート、鉄筋コンクリート或いは鋼矢板等により施工されました。

5. 構造物工事（樋管、特殊工事、橋梁）

樋管や樋門が26ヵ所に、その他の構造物が4ヵ所に築造され、橋梁は6ヵ所に架橋されました。これらのうち志木・宗岡では、田子山樋管、市場樋管、郷土樋管が設置された他、宗岡閘門と洗堰、宗岡潜管、伊呂波橋が築造されました。

（1）宗岡閘門及び洗堰

工事の主目的である洪水防御の他に江戸時代から続く舟運等の船舶航行も必要とされ、伊呂波橋下流28間（50.9m）の地点に閘門及び洗堰を新設しました。（これらは1979年に撤去されました。）

A. 閘門

基礎杭として長さ18尺（5.5m）～35尺（10.6m）の松丸太を使用。主体構造は全て鉄筋コンクリート造で通船幅19尺8寸（6.0m）、閘室（船が上下する部分）有効長85尺（25.8m）。その扉は前後各2枚の鋼鉄製観音開き型とし、扉1枚の重量は約1,200貫（4.5t）。この開閉は人力により1回の通船操作時間は約20分。閘門の大きさは航行する各船種に対し充分安全であり、更に将来の船体拡大を見越したものでした。

B. 洗堰

平常時流量の全部を洗い堰により堰き止め溢流させることにより、上流低水路の水位上昇を図っています。堰による揚水位は低水時3尺8寸（1.15m）で、直接影響区域は4,400間（8.0km）に達しました。又、洪水時には堰扉を全



いろは橋たもとの新河岸川改修碑

開にし低水路及び左岸側高水路にて最大流量を流します。洗堰は1ヵ所の通水幅11尺（3.3m）、中央高14尺4寸（4.4m）のアーチ形が3連続した鉄筋コンクリート造で、基礎には長さ35尺（10.6m）の松丸太を使用。扉は幅12尺（3.6m）、高さ6尺（1.8m）、重量450貫（1.7t）の鋼鉄製引き揚げ扉で人力巻き揚げ式。

（2）宗岡潜管

江戸時代から新河岸川の上を渡っていた野火止用水のいろは樋は明治31年に川底に埋められた鑄鉄製潜管に改築されましたが、この付近は新河岸川・柳瀬川の合流点の移動など全く流路が変わるため再度改築されました。付近は宗岡閘門・洗堰、いろは橋の架橋もあり困難な工事だったということです。この工事では主に在来鉄管を利用し不足分に鉄筋コンクリート管を使用、その改築延長は60間（109.1m）余りとなりました。鉄管継ぎ手個所には杭を打ったコンクリート基礎台を造り、継手には鉛充填の上更にコンクリートを巻き漏水の絶無と構造の確実とが図られました。

（3）伊呂波橋

県道浦和所沢線が新川を横断する個所に新設され、当初は幅員15尺（4.6m）、長さ150尺（45.5m）の木橋の計画でしたが、この地点には閘門、洗堰、潜管等の施設があり、川幅広く且つ交通頻繁な重要路線のため其の構造形状が再検討され、実施では全て鉄筋コンクリート造で幅員は21尺9寸（6.6m）となりました。（現在のいろは橋は1997年に架け替えられたもの。）

【参考文献】

『新河岸川文化』4号、昭和55年、小畑包美（昭和6年埼玉県発行の新河岸川改修工事概要の復刻）

6/30
(土)

多自然川づくりフォーラム in 柳瀬川・不老川・砂川 ～美しい川づくりを求めて～

昨年5月に「多自然川づくりへの展開」という新たな提言が行われ、これまでの多自然川づくりのあり方が見直されたことをきっかけに、これまでの柳瀬川、不老川、砂川などの川づくりを振り返り、それぞれの川が抱える課題を解決していくため、最新の川づくりについて学び合うために開催され、当会は柳瀬川流域ネットワークの一員として参加・協力しました。

講師陣には、国土交通省河川局河川環境課から小俣篤河川環境保全調整官、九州大学から島谷幸宏教授、(独)土木研究所自然共生研究センター萱場祐一センター長、(株)吉村伸一流域計画室吉村伸一代表等日本を代表する豪華メンバーを揃え、午前は各川の現地



見学会を、午後には所沢市民文化センターミューズでフォーラムを行い、約150名の参加者があり、大変な盛況ぶりでした。

あまりにも濃密な内容であったため、上手くまとめることは出来ませんが、私にとって一番印象的だったのは島谷教授がお話された、『多自然川づくりの基本は、「要所の保全(いい所は守りましょう)」、「川を自由に」、「つながりを大切に(上流下流、支川)」、「計画時に模型を作ろう」であり、逆に「保全できるものをつぶす」、「川底を平らにする」、「川を真っ直ぐにする」、「水際を固め単調にする」、「(堰等で)連続性を断つ」、「川を浅くする」、「石を取り除く」等のことは、生き物が棲まなくなるため多自然川づくりとは言えません。』という言葉でした。(伊藤智明)

【主催】柳瀬川流域ネットワーク、不老川流域川づくり市民の会、砂川流域ネットワーク

【助成】(財)サイサン環境保全基金

【後援】国土交通省、東京都建設局河川部、埼玉県

10/20
(土)

平成19年度 新河岸川流域フォーラム ～みんなの流域、みんなの治水！～

総合治水対策開始より25年を記念した今回は、志木市をフィールドに「総合治水対策の振り返り」というテーマで開催されました。

午前中のフィールドワークでは、エコシティ志木と志木市都市整備部が協力し、当会からは代表・天田眞と毛利が現地解説を努めました。今までの治水対策を振り返り、未来につなげるという意味で、志木市に残されている江戸時代の「輪中堤(総囲堤)」、昭和時代と平成の新河岸川の堤防、併せて樋門や水塚は、参加者にとって非常に新鮮な感動をもたらしたのではないかと思います。

午後の事例報告では、志木市、西東京市の取り組みに続いて当会事務局長の伊藤智明が「水谷田んぼ」について報告しました。



「総合治水」と「多自然川づくり」について講演された九州大学島谷幸宏教授の報告にも、輪中の考えを生かした治水対策の発表などがあり、志木市に残る治水の遺産・思想を今後の治水に活かすことができるということを改めて実感し、非常に有意義なフォーラムであったという感想をもちました。(毛利将範)

【会場】志木市・志木市民総合センター

【協力】エコシティ志木・志木市

【主催】国土交通省荒川下流河川事務所
新河岸川流域川づくり連絡

生き物情報は Tel/Fax 048-471-4275 Email: qwj11624@nifty.com(毛利)へ
ホームページ⇒<http://homepage3.nifty.com/moh/kappa/sizen-info.html>

《鳥類》

ゴイサギ(幼鳥；別名ホシゴイ) → 9/16(日) 柳瀬川ウォッチで 獲物を捕らえるあの鋭い目が脳裏に焼きついています【北原正代】

オオタカ(1) → 9/16(日) ハシブトガラス 5～6羽に追われ、羽をつつかれ、新河岸川下流方向に飛び去りました【北原正代 毛利将範】

カワセミ(1) → 10/21(日) ホバリングやダイビングを何度もじっくりと披露してくれました【山崎光久 金子秀樹 毛利将範】

《魚類》

グッピー(30ほど) → 11/18(日) (要注意外来生物)【天田眞】

カダヤシ → 11/18(日) ウォッチングや総合学習のときにほぼ毎回捕れています(特定外来生物)【天田眞 伊藤智明】

《ほ乳類》

タヌキ(1) → 9/22(土) 夜 西原斜面林近くの東上線線路際の茂みで発見【天田いづみ】

タヌキ(1) → 10/17(水) 夜 西原斜面林に入っていく【天田いづみ 天田眞】

《昆虫》

カンタン(声) → 9/5(土) 夜 鳴く虫の声を聞く会の帰り道、東武東上線の線路脇の畑の繁みで【毛利将範】

《植物》

オオフサモ → 10/13(土) 発見・駆除したものが現在もまだ一部残っている状態(特定外来生物)【天田眞 伊藤智明】



↑ゴイサギの若鳥 9/16(北原)



↑ホバリングするカワセ
10/21(山崎)

環境 ひとくちメモ(7) 伊藤 智明

大気汚染防止推進月間

環境省では、毎年12月を大気汚染防止推進月間として、きれいな空を守ることの大切さを呼びかけています。

12月は自動車交通量の増加、ビルや家庭の暖房、さらに冬季特有の気象現象「逆転層」の影響もあり、窒素酸化物(NOx)や粒子状物質(PM)などの大気汚染物質濃度がより高くなる時期です。

大気環境を守るため環境省では、「エコドライブを実践してみましよう」、「自転車や電車の使用を心がけましよう」、「暖房の使用を控えましよう」、「大気汚染の防止について、みんなで考えてみましよう」といったことを提案しています。詳細は以下のホームページを

ご参照ください。

○ 環境省
大気環境・
自動車対策
ホームページ

「空にやさしい、いい一日を、お過ごしください。～12月は大気汚染防止推進月間です～」

<http://www.env.go.jp/air/osen/gekkan/index.html>



☆会員状況

2007年度分更新済みの正会員は、
個人61、団体2、賛助2です。

■新入会員

遠藤きょうこ さん

よろしくお願い致します

★本会の財政基盤は、
会員の方の年会費が
頼りです。

★2007年度分、更新
まだの方は継続をよ
ろしくお願いします。

★宛名シールに会費の有効期間が
書いてあります。チェックしてく
ださい。



■当会の団体正会員

志木おやこ劇場
生活クラブ生協志木支部

■当会が参加している、または主な協力団体

いろは遊学館利用者の会
グループぼんぼこ
(財)埼玉県生態系保護協会志木支部
志木おやこ劇場
志木市コミュニティー協議会
市内小中学校
新河岸川水系水環境連絡会
柳瀬川流域ネットワーク
新河岸川流域川づくり連絡会（国土
交通省）
新河岸川流域川づくり懇談会（埼玉県）

情報満載！
当会のホームページ

公式ホームページ

<http://www.cc.e-mansion.com/~eco/>

志木まると博物館「河童のつづら」

<http://homepage3.nifty.com/moh/kappa/>

志木市立郷土資料館の 農具 その1

マンノウ



マンノウは田起こしに使用されたものだが種類も幾つかある。マンノウの歯は4本で、歯先にバチ（歯先の広い部分）の付いているもの、歯先が尖っているもの、元より歯先にゆくほど少し窄まっている型のものなどがある。

田起こしは一番起こしから三番起こしまで行われ、バチのあるマンノウは主に一番起こしに使用された。歯先が尖っているマンノウは幾分小型である。柄はいずれも使用する人に合わせて長さは違うが、当館のものは歯先がバチ形のものは170cmの竹の柄であり、歯先の尖っているものは150cmの自然木の柄が付いている。

マンノウは耕耘機が出回る昭和30年代まで使用されていた。



【執筆・撮影協力】
志木市立郷土資料館
〒353-0002中宗岡3-1-2
☎ 048-471-0573
月曜日休館

万能を使った田起こし
（大利根町 昭和23年）
『埼玉の民俗写真集』平成3年
埼玉県編集・発行より

校舎の屋上から見た 宗岡第三小学校の校庭

昔



今



写真提供 志木市立宗岡第三小学校 (佐竹博校長)

昔 平成9年6月1日撮影
今 平成19年11月22日撮影

昭和52(1977)年に開校した宗岡第三小学校は、江戸時代に造られた堤防をはさんで内側に校舎、新河岸川寄りに校庭があります。

新河岸川堤防の拡幅工事により、校庭はその姿を変えました。

写真上が今から10年前の平成9(1997)年のようすです。細長い校庭に隣接して左に大きな池が見えます。この池は、昔の新河岸川の流れの跡を利用して直前まで営業していた「樋の詰(ひのつめ)園」という釣り堀でした。堤防を拡幅すると校庭が狭くなるために、この池を埋め立てて校庭を横に広げたのが、**写真下**の現在の姿です。

池を埋め立てるとき、子どもたちが池周辺の自然観察をし、また、そこに茂っていたマコモやハンゲショウなどの貴重な植物を小学校の敷地内に移植もしました。

ちなみに、**下の写真**の右下の電柱の奥にある繁みはクヌギの古木です。校庭で遊ぶ子どもたちを見守り続けてきた宗岡三小のシンボルツリーでもあります。(毛利将範)

ヒドリガモ



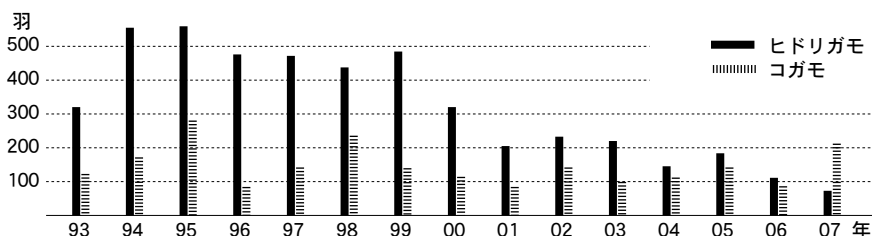
草を食べるヒドリガモの群れ

ヒドリガモは、ユーラシア大陸北部で繁殖し、冬季に日本などに渡ってきます。緋鳥鴨（ひどりがも）という日本名は、オスの頭部の褐色を緋色に見立てての命名と思われます。

秋になると柳瀬川にも多数渡ってきます。柳瀬川の広い河川敷で、数十羽の群れになってヒロハウシノケグサやセイヨウカラシナなど緑色の草を食べている光景に出会えます。その周辺をよく見ると緑色のフンがたくさん落ちています。さわってみるとパサパサした繊維質で、鳥のフンという感じがしません。

以前は柳瀬川で100羽以上の群れを何ヵ所かで見ることがもありました。散歩中の犬に驚いて一斉に飛び立ち川に滑り込む光景は圧巻でしたが、今ではそのような大群にはなかなかお目にかかれなくなりました。

グラフを見ると、変動の少ないコガモに比べて2000年ころからはっきりと減少しているのがわかります。繁殖地であるシベリアや渡りの中継地の環境が変わってきた、柳瀬川が棲みに



【グラフ】 ヒドリガモとコガモの数の変化

資料＝埼玉県内ガンカモ一斉調査（主催：（財）埼玉県生態系保護協会）
場所＝柳瀬川【志木大橋～栄橋下流の新河岸川との合流点までの4km弱】

くなくなった… 原因としていろいろ考えられますが、はっきりとしたことはわかりません。

ちなみに、柳瀬川にはヒドリガモにごく近い種の**アメリカヒドリ**も毎年必ず1～2羽が渡ってきます。ヒドリガモの群れの中にたった1羽のアメリカヒドリを探す。これも柳瀬川でのカモウオッチングの楽しみの一つです。



ヒドリガモ（左）とアメリカヒドリのオス

編集後記

◇編集作業は余裕をもって… と、考えているのですが、つい執筆の依頼が遅くなったり、資料の収集が遅くなったりでばたばたしてしまいます。執筆者の方々、印刷作業のボランティアの方々、いつもありがとうございます。

◇編集の打ち合わせなどは、月1回の運営委員会の中でおこなっています。誰でも参加できますので、興味のある方はご参加ください。（ふくろう）

● エコシティ志木通信
● 第48号・2007年12月1日
● 発行

● **NPO法人エコシティ志木**

● 〒353-0006 埼玉県志木市館 1-1-2-108

● 電話/FAX 048-471-1338（天田眞）

● URL <http://www.cc.e-mansion.com/~eco/>

● E-mail eco-shiki@ff.e-mansion.com

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています